

Title	普遍者の束理論のメレオロジカルな例化物説
Sub Title	Mereological instance view of bundle theory of universals
Author	横路, 佳幸(Yokoro, Yoshiyuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2023
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.151 (2023. 3) ,p.85- 106
JaLC DOI	
Abstract	What are concrete particulars, such as an apple in front of me or a chair in which I am sitting right now? According to the instance view, a version of the bundle theory of universals proposed by Gonzalo Rodriguez-Pereyra, concrete particulars are not bundles of universals, but instances of the bundles. This view, unlike the classical bundle theory, can explain Black's universe where there are two completely indiscernible spheres, but several questions can be raised against this view. In order to offer appropriate responses to such questions, I propose the mereological instance view, or MIV, which takes over the basic spirit of the instance view but reconstructs it from the viewpoint of the mereological bundle theory. By introducing some primitive but intuitively comprehensible relations including qualitative composition, MIV interprets bundles of universals and instances as "plurality of universals" and "qualitative fusion" respectively. Furthermore, MIV will advance the instance view's explanation for the relation of being constituent of particulars, the ground for the distinctness of bundles of universals and instances, and Black's universe. Finally, I argue that MIV points to one possible path for the development of the instance view.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000151-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

普遍者の束理論のメレオロジカルな 例化物説

横 路 佳 幸*

Mereological Instance View of Bundle Theory of Universals

Yoshiyuki Yokoro

What are concrete particulars, such as an apple in front of me or a chair in which I am sitting right now? According to the instance view, a version of the bundle theory of universals proposed by Gonzalo Rodriguez-Pereyra, concrete particulars are not bundles of universals, but instances of the bundles. This view, unlike the classical bundle theory, can explain Black's universe where there are two completely indiscernible spheres, but several questions can be raised against this view. In order to offer appropriate responses to such questions, I propose the mereological instance view, or MIV, which takes over the basic spirit of the instance view but reconstructs it from the viewpoint of the mereological bundle theory. By introducing some primitive but intuitively comprehensible relations including qualitative composition, MIV interprets bundles of universals and instances as "plurality of universals" and "qualitative fusion" respectively. Furthermore, MIV will advance the instance view's explanation for the relation of being constituent of particulars, the ground for the distinctness of bundles of universals and instances, and Black's universe. Finally, I argue that MIV points to one possible path for the development of the instance view.

* 日本学術振興会／南山大学社会倫理研究所

序

形而上学を中心問題の一つは、個物 (particulars) とは何かという問いである。目の前に置かれたリングや私がいま座っている椅子などを例とする、数々の性質を持ち時空中の位置を占めるこうした具体的な存在者は、形而上学的に見れば、つまるところどのような存在者なのだろうか。この問いに対し古典的な普遍者の束理論は、具体的な個物とはそれが持つ普遍者の束にほかならないと主張する。これによれば、個物 x が普遍者 F を持つのは、 x が F を構成要素とするような普遍者の束であるおかげであり、 x の数的同一性はその構成要素である普遍者の共有から説明可能である。しかしこの見解は、普遍者を一つ残らず共有する完全に不可識別な個物 (普遍者の束) が二つ別個に存在するという事態を認めることができない。そこで、古典的な束理論を修正する理論として、ゴンサロ・ロドリゲスペレイラによって提案されたのが、例化物説、すなわち普遍者の束とは別にその例化物を新たに措定する理論である (Rodriguez-Pereyra 2004)。この説によれば、個物とは普遍者の束ではなく、その束の例化物である。古典的な束理論とは対照的に、例化物説は、完全に不可識別な「個物」が二つ別個に存在することを説明することができる——いまや「個物」とは、普遍者の共有から同一性が決定されるような普遍者の束ではなく、その束の例化物、すなわち同時に二つ以上の場所を占めることはできないという意味で複現不可能な例化物だからである。

一見すると例化物説は、個物とその同一性に対して優れた説明を与えるように見える。しかし、例化物を措定することに起因する疑義はいくつか残る。第一に、個物 x が普遍者 F を持つことを例化物説はどのように説明するのだろうか。それは、古典的な束理論の単純な説明、すなわち x と F の関係を束とその構成要素という観点から分析する説明を維持できているだろうか。第二に、普遍者の束とその例化物は同時空でほとんどの普遍者を共有しているように見えるが、両者は複現可能 (同時に二つ以上の場

所を占めることができる)かどうかで決定的に異なっている。しかし、なぜ例化物ではなく普遍者の束だけが複現可能なのだろうか。例化物説はこの基礎づけの問題に答えねばならない。第三に、例化物説が本当に、完全に不可識別な「個物」が二つ別個に存在することを十全に説明できているのか疑わしく見える。少なくとも、「普遍者を完全に共有する(普遍者の束)例化物は数的に同一である」という原理をただ単に拒否するだけでは不十分である。例化物説は、この原理がなぜ成立しないかを——例化物をアドホックな仕方と定義することなく——秩序立てて説明する必要がある。

本稿で私は、例化物説に投げかけられる一連の疑義を乗り越えるために、ある理論を提案する。その理論とは、例化物説の基本精神を受け継ぎつつも、普遍者と普遍者の束と例化物という三者の関係を質的なメレオロジーの観点から捉え直す、メレオロジカルな例化物説である。この理論は、質的な真部分および質的な組成を新たに導入することで、普遍者の束と例化物を「普遍者の複数性」と「質的な融合体」として理解する。さらにこの理論は、例化物に対して提起される上記の疑義に対しても有意義な応答を与えることができるだろう。最終的に私は、メレオロジカルな例化物説は例化物説のありうべき一つの道を指し示していると主張する。

1. 古典的な普遍者の束理論から例化物説へ

先述の通り、古典的な普遍者の束理論によると、私たちが普段遭遇する個物 x とは、複数の普遍者を構成要素とするような束であり、 x の同一性はその構成要素から説明可能である。たとえば、私の目の前にあるリングは、赤さや固さ、みずみずしさなどの普遍者を構成要素とする束にすぎず、それが他のリングから数的に区別されるのは構成要素を異にするからである。しかしこの古典的な束理論は、「ブラックの宇宙」と呼ばれる悪名高い事例をうまく説明することができないと考えられてきた (Black 1952)。

この宇宙では、大きさや形、色、温度などのあらゆる普遍者において完全に不可識別な二つの鉄球 c と p が存在する。古典的な束理論は、 c と p が二つの鉄球であること、すなわち c と p の数的差異性を否定せねばならないように見える。なぜならば、それ（ら）は構成要素としての普遍者を完全に共有しているからである。

しかし、ロドリゲスペレイラが発明した束理論、すなわち例化物説によると、ブラックの宇宙は必ずしも束理論の障害にはならない (Rodriguez-Pereyra 2004)。その基本的な考えはこうである。個物に相当するのは普遍者の束ではなく束の例化物 (instance) である。束が存在するときにはいつでもその束の例化物が存在するが、それらは数的に区別される別個の存在者である。一方で、普遍者および普遍者の束は同時に二つ以上の場所を占めることができるという意味で複現可能 (repeatable) であり、このリングが構成要素として持っている赤さとあのリングが構成要素として持っている赤さは、それぞれ別々の位置に丸ごとあるのだとしても数的に同一の普遍者である。これに対し、普遍者の束の例化物は同時に二つ以上の場所を占めることはできず、異なる位置を占めている例化物は数的に同一ではない。これが意味するのは、ある普遍者の束のこの (this) 例化物は、それとまったく同一の束のあの (that) 例化物とは数的に同一ではないということである。いまやブラックの宇宙がどのように説明されるかも明らかだろう。問題の鉄球は同じ普遍者の束の例化物であり、例化物は束と違って複現可能ではないために、異なる位置を占める c と p は数的に異なる例化物なのである¹。

2. 例化物説に提起される疑問

しかしこの種の束理論には、例化物という新たな存在論上のガジェットを導入することに起因する疑問がいくつか提起されるだろう。ここでは三つの疑問を取り上げたい。

第一に指摘すべきは、例化物説は個物と普遍者の間の結び付きを複雑なものにしてしまうのではないか、という懸念である。いま、個物とそれが持つ普遍者の間の関係を便宜上、所持関係 (having) と呼ぶことにしよう。たとえば、赤いリングは赤さを「所持している」と言えるだろう。こうしたとき古典的な束理論は、個物を普遍者の束に還元することで、個物による普遍者の所持関係を構成要素 (constituents) という関係だけから分析することができる²。この分析によると、個物 x が普遍者 F を所持するのは——個物 x とは普遍者の束にほかならないがゆえに——普遍者の束であるところの x が F を構成要素とするおかげである。例を挙げれば、個物としてのリング a が赤さを所持しているという事態は、普遍者の束 a の構成要素に赤さが含まれている (つまり、赤さが a という束を構成する一要素になっている) というにほかならない。所持関係に対する説明の単純さは、古典的な束理論が享受する理論的利点の一つである。

これに対し例化物説は、個物と普遍者の束を同一視するどころか、積極的にその数的差異性を強調するために、所持関係に対する単純な説明はもはや維持できない。古典的な束理論と違って、例化物説は所持関係を次のように説明する必要がある。すなわち、 x が F を所持するという事態とは、 x と数的に同一ではないが x を例化するような普遍者の束 B が F を構成要素とするおかげである、と。こうしたやや回りくどい説明が求められるのは、仮に F が何らかの普遍者の束 B を構成する一要素になるとしても、 B が個物 x とは別個の存在者だとしたら、 B と F の間の構成要素関係だけでは、ほかならぬ x が F を所持することの説明にはならないからである。換言すれば、個物 (例化物) と普遍者の間の所持関係を説明するのに、例化物説はいまや普遍者とその束を繋ぐ構成要素関係だけでなく、それとはまったく独立に理解される関係として、束とその例化物を繋ぐ「例化関係」をも新たに持ち出さねばならない。しかしこれは、個物と普遍者の間で成立する、統一的に理解可能な緊密な関係を犠牲にしかねない説明

ではないだろうか。古典的な束理論では、構成要素関係だけで個物による普遍者の所持を説明できたのに対し、例化物説では、構成要素関係と例化関係という独立に措定される二つの関係が必要となり、本来シンプルであるはずの所持関係が複雑なものになってしまっている。したがって、例化物説には、所持関係に対する古典的な束理論の説明をむしろ後退させているという疑惑がかけられる。

第二に例化物説は、ベンジャミン・カーティスが指摘するように、彫像と粘土の塊というよく知られた事例で提起されてきた問題と同構造の困難にも直面する (Curtis 2014)。彫像とその材料である粘土の塊について、少なからぬ論者が支持してきたのは次のような主張である。すなわち、彫像と粘土の塊は、たしかに種性質や様相的性質、審美的性質を異にするため、同一者不可識別の原理により数的に同一ではない。しかし前者は後者によって構成されており、まったく同じ時空領域で一致する両者は、他の多くの性質 (大きさや色、重さなど) を共有するなどして緊密に関係し合っている、と。しかし、こうした見解は基礎づけの問題 (grounding problem) と呼ばれる問題を抱えている。彫像と粘土の塊が時空上で完全に一致し、ほとんどの性質を共有するのだとしたら、両者が一部の性質で異なっていることを基礎づけている根拠とは何だろうか。この説明は決して容易ではない。同様に例化物説によると、普遍者の束とそれが例化する例化物はまったく同じ時空領域で一致し、ほとんどの普遍者を共有しているように見えるが、両者は複現可能かどうかで決定的に異なっている。だが、なぜ普遍者の束だけが複現可能なのだろうか。そこで「普遍者の束は普遍者の一種だが、例化物は普遍者ではなく個物だから」と応答することは、いまの問題に対する説得的な解決策にはならないだろう。なぜならば、複現可能なものとして定義される存在者が普遍者で、そうでないものとして定義されるのが個物である限り、その応答は定義を繰り返しているにすぎないからである。結局のところ、基礎づけの問題が例化物説に対して投げかけ

ているのは、まったく同じ時空領域で一致し、ほとんどの普遍者を共有しているように見える普遍者の束とその例化物が、普遍者かどうか、すなわち複現可能性を持つかどうかにおいて異なっている形而上学的根拠とは何か、という問いなのである。束による例化を認めて例化物という新たな存在を個物と同定するだけでは、この根拠を明らかにすることはできない。もちろん、いっそのこと複現可能性の違いを無根拠のままにしておくことも不可能ではないかもしれない。しかし、もし普遍者の束だけが複現可能であることの根拠を提示し、そのミステリアスさを少しでも軽減できるのであれば、それに越したことはないだろう。ましてこの根拠は、例化物説に根幹的な「束とその例化物は数的に異なる」という主張にも密接に関わっているだけに、なおさら説明するのが望ましい事柄である。

例化物説に提起される最後の疑問に移ろう。こちらは、冒頭で見たブラックの宇宙への応答に関わるものである。不可識別な鉄球の数的差異性に対する例化物説の応答とは、実質的には「同じ普遍者の束から例化されるとしても、異なる位置を占める例化物どうしは数的に同一ではない」という点のみである。実際、ロドリゲスベレイラが鉄球の数的差異性を説明する際に頼っているのは、「普遍者を完全に共有する（すなわちどのような普遍者を所持しているかにおいて一切識別できない）個物 x と y は数的に同一でなければならない」という原理を拒否するという戦略である（Rodriguez-Pereyra 2004, 77）。この原理を拒否すれば、たしかに c と p は普遍者を完全に共有し、まったく同じ普遍者の束による例化物だとしても、数的に同一の例化物とは限らない、と主張できる。しかしながら、もしこの原理を充足しない存在者として例化物が本当に存在するとしたら、例化物説にとってこれほど都合のよい世界はないだろう。例化物説はたしかにブラックの宇宙における球体を一つの球体と捉えずに済むという利点を享受できるかもしれないが、普遍者を完全に共有する例化物が数的に同一とは限らないと考えるための根拠を提示しているとは言いがたい。この根拠

を提示せずに、単に問題の原理を否定するだけでは、ブラックの宇宙という問題を回避するためだけに都合のよい便利な存在者を措定しているだけではないか、という誹りから逃れられない。言い換えれば例化物説は、問題の原理を放棄せねばならないという束理論一般に課せられた理論的要求を充足する存在者として、アドホックに定義された「例化物」をただ措定しているにすぎないように見える。

3. 例化物説からメレオロジカルな例化物説へ

しかしながら、私の考えでは、ある理論の助けを借りれば、例化物説はその基本精神を維持しつつ上記の苦境から逃れることができる。助けとなる理論とは、L・A・ポールによって提唱された、メレオロジカルな束理論である (Paul 2002, 2006, 2017)。この理論によると、私たちが普段遭遇する「個物」とは、複数の普遍者 (または性質) を質的な真部分 (proper qualitative part) とするような質的でメレオロジカルな全体である。ポールによると、質的な真部分関係は、古典外延メレオロジーで措定される真部分関係と同じように、非反射的で非対称的で推移的な関係すなわち狭義順序である。また、 x が y の質的な部分であるとは、 x が y の質的な真部分である、もしくは x と y が同一であるときかつそのときのみである。すると、 x が (複数の) yy の質的な融合体であること、すなわち x が yy から質的に組成される (qualitatively composed) ことは、質的な部分関係を用いて次のように定義される。すなわち、 x はすべての yy を質的な部分として持ち、かつ x は yy の各々と質的に互いに素である (すなわちどの yy とも質的部分を共有しない) ような質的部分をいっさい持たない、と。これに基づけば、個物 x が普遍者 F, G, H から成る束であることは、 x が F, G, H から質的に組成される、すなわち F, G, H を質的な部分として過不足なく持っている質的な融合体であるということにほかならない。また、個物 x が一つの普遍者 F を所持することは、 x が F を質的な真部分とすること

から理解可能である。したがってメレオロジカルな束理論は、普遍者と普遍者の束の関係をメレオロジーの観点から捉え直すことにより、複数の普遍者を一つの束へと統一化する関係——それは古典的な束理論では伝統的に「共在 (compreence)」や「共例化 (coinstantiation)」などと呼ばれてきた——を直観的に理解可能な質的な組成関係によって分析することができる (cf. Paul 2017, 40)。

では、メレオロジカルな束理論はどのようにして例化物説の助けとなるのだろうか。そこで核となる考えは次の二つから成る。第一に、「普遍者の束」と「束の例化物」はそれぞれ、メレオロジカルな束理論にとっての「質的な諸部分としての普遍者の集まり／複数性」と「質的な融合体」に相当するものとして理解可能である。第二に、普遍者の束と例化物の間の「例化関係」は、メレオロジカルな束理論にとって「質的な組成」に相当するものとして再構成できる。この二点を真剣に受け止めると、「個物とは、普遍者の束によって例化される例化物である」という例化物説の説明は、「個物とは、普遍者の複数性から質的に組成される質的な融合体である」として理解可能である。以下では、こうしたメレオロジカルな観点から例化物説を捉え直す理論をメレオロジカルな例化物説 (mereological instance view)、略して MIV と呼ぼう。

MIV は、少なくとも二つの点で例化物説の基本精神を引き継いだ理論である。第一に、普遍者の束が存在するときにはいつでもその束の例化物が存在するという例化物説に独自の主張は、古典外延メレオロジーにおける組成と同様に、質的な組成を無制限 (unrestricted) とすることで捉え直すことができる。大雑把に述べれば、無制限の質的な組成が述べるのは、必然的に、任意の普遍者の複数性 yy について、 yy から質的に組成される質的な融合体 x が存在するということである³。普遍者の束からその例化物がいかなる例外もなく導かれることは、普遍者の複数性 yy からその融合体 x が無制限に組成されることに正確に対応している。つまり、「普遍者

の束があるにもかかわらずその例化物が存在しない」という事態を回避する——ないしは、普遍者の束とその例化物が「セット」になっていることを保証する——ための手段は、MIVにおいては、無制限の質的な組成という、メレオロジーで（やや議論含みではあるが）しばしば措定されるものと類比的な原理によって確保することができる。

第二に、普遍者の束とその例化物が数的に異なる二つの存在者であることは、質的な組成が数的同一性ではないことによって捉え直すことができる。この点もやはり、時空上または物質上の組成関係がしばしば同一性から区別されるのと類比的だろう。質的であれ非質的であれ組成関係は、たしかに数的同一性とよく似ているように見えるが、少なからぬ論者が指摘してきた通り、そのことは同一性としての組成（composition as identity）を立証するものではない（Lewis 1991, 87; Yi 1999; Sider 2007）。質的な組成の場合、質的な融合体 x が普遍者の複数性 yy によって質的に組成されるとき、 x は yy の一つ（is one of）ではありえないが、 x は x の一つである。また、 yy は複数であるという性質を持つが x は持たない。このように質的な融合体 x と普遍者の複数性 yy は必ずしもあらゆる性質において不可識別というわけではないため、同一者不可識別の原理により x と yy は決して同一ではない——それでも x と yy はたしかにメレオロジー的には緊密に結び付いている。つまり、「普遍者の束」に相当する普遍者の複数性と「例化物」に相当する質的な融合体は、質的な組成関係によって結び付いているものの、質的な組成が同一性ではない限りにおいて両者は数的に同一というわけではない。したがって、例化物説が束とその例化物の間に措定していた「例化関係」とは、MIV ではつまるところ、質的な融合体と普遍者の複数性の間に成立する、無制限だが数的同一性から厳密に区別される質的な組成関係として解釈可能なのである。

4. メレオロジカルな例化物説による応答

MIV は、例化物説に対して提起された疑問に適切な応答を用意することができるように思われる。先に見たように、例化物説は構成要素関係に加えて例化関係を付け足してしまうために、個物による普遍者の所持関係の統一的な理解ないしは単純性を諦めてしまうと考えられた。しかし MIV は、普遍者と普遍者の束と例化物という三者を質的なメレオロジーの観点から統一的に理解し直すため、所持関係をより直観的に理解可能である。個物 x が普遍者 F を所持することは、 x と数的に同一ではないが x を例化するような普遍者の束 B が F を構成要素とするおかげだと主張する必要はもはやない。その代わりに、 x が F を所有するとは、 F が質的な融合体 x の質的な真部分となるおかげにほかならない。つまり MIV は、狭義順序である構成要素関係をメレオロジカルに解釈し直すことで、所有関係を（同じく狭義順序である）質的な真部分関係によって説明することができる。こうした説明は直観的であるばかりでなく、少なくとも例化物説が与える説明よりもシンプルではないだろうか。

もちろん、ここで例化物説は、「そもそも所有関係の説明を複雑にしているわけではない」と反論するかもしれない。この反論によれば、例化物そのものが普遍者を構成要素として直接に持つことは妨げられない⁴。だとすると、個物 x が普遍者 F を所有することは、普遍者の束を持ち出すまでもなく、その例化物としての x が F を構成要素とすることによって分析可能となるだろう。つまり、個物（例化物）による普遍者の所有関係を説明するのに、普遍者の束をいちいち介する必要はない、と言えるかもしれない。しかしこのように論じることは、例化物説において「普遍者の束」を対象または個体として措定する存在論上の動機が損なわれることを意味するだろう。というのも、そこでは普遍者の束は、古典的な束理論と違って、個物の同一性を説明することに貢献しないばかりか、もはや所有関係の説明にも貢献しないからである。だとすると、例化物説において「例化

物」とは別に「普遍者の束」が新たな対象として措定される根拠がまったく不明瞭になってしまう。

しかし MIV はこの事態をむしろ好意的に捉えて、次のように説明できるはずである。すなわち、「普遍者の束」とは、普遍者が複数集まったいわばコレクションにすぎず、そもそも新たな対象または個体というわけではない、と⁵。たとえば、赤さ (R) や固さ (H)、みずみずしさ (F) などの複数の普遍者がただあるだけで、普遍者の複数性という「対象」が新たに生まれるわけではない。なぜならばそれは本来的に数え上げることができないからである。問題の普遍者の複数性を R, H, F で表すとすると、 R, H, F は三つではありえない。三つあるのはそれぞれ別の普遍者であって、普遍者の複数性が三つあるわけではないからである。他方で R, H, F は一つでもありえない。普遍者の複数性は本質的に複数でなければならないからである。もし R, H, F が一つに思えたとしたら、それは R, H, F から統一化されてでき上がる存在者、すなわちそれらから質的に組成される融合体と混同している——それがまさしく（三つしか普遍者を所持しないものと想定・単純化された）個物としてのリングである。いずれにしても、普遍者の複数性はいまや、複数の普遍者があるという事態以上のものではなく、質的な融合体としての個物から数的に区別されるばかりか、新たな「対象」として認められるものではないのだから、個物による普遍者の所有関係の説明に「普遍者の束」が役立たないとしても何ら不思議な点はない。普遍者の複数性（ないしは普遍者の束）が担うべき役割は、ただ一つ、質的な融合体（ないしは束の例化物）を質的に組成するのに必要な材料になるということだけである。裏返せば、個物としての質的な融合体が普遍者を質的な真部分とするという考えだけで、本来所有関係の説明には十分なのである。例化物説ではあまりはつきりとしなかったが、普遍者の束を単なる普遍者の複数性と捉える MIV は、「束」の存在論的地位をはっきりと格下げする理論だと言えるだろう。

普遍者の束を新たな対象または個体と捉えないことは、MIVにもう一つ理論的利点をもたらす。一般に、複現可能なものを複数集めただけのコレクションもまた複現可能であるというのは直観に適っている。すると、「普遍者の束」としての普遍者の複数性は、他の普遍者と同じく複現可能であり、複現不可能な個物ではありえない。その代わりにMIVにおいて「個物」の名に値する候補者は、普遍者の複数性から厳密に区別される対象、すなわち質的な融合体しかありえない。言い換えれば、質的な融合体を産出する質的な組成とは、普遍者の複数性と質的な融合体の数的差異性の説明を可能にするだけでなく、複現可能な複数性から複現不可能な具体物としての個物を産出する力能を持った関係である⁶。したがって、「普遍者の束」をただの普遍者の複数性と捉え、さらに質的な組成を普遍者の複数性から具体物を生み出す関係だと理解することは、「普遍者の束」が複現可能である一方で「例化物」が複現可能でないとする例化物説の主張に一つの根拠を与えるはずである。換言すれば、例化物説に投げかけられた基礎づけの問題は、MIVでは、「普遍者の束とは何か」や「質的な組成は具体物を産出する力能を持つか」といった、メレオロジカルな束理論で措定される存在者の形而上学的本性を問う観点から応答可能である。少なくともこれは、個物と普遍者の定義を繰り返すよりも有意義な応答となるだろう。しかも、複数の普遍者があるだけの「普遍者の束」が新たに措定されるべき対象ではないとすれば、そもそもそれが個物としての質的な融合体と大部分の性質を共有しているという前提にも疑義を呈することができる。というのも、赤いリングと対応する質的な融合体は赤さを一部に含んでいるのに対して、普遍者の複数性それ自体は色を持てるような存在者ではなく、実際赤くもなんともないからである。

先に見たように、普遍者の束と例化物の数的差異性、すなわち普遍者の複数性と質的な融合体の数的差異性は、同一性としての質的な組成関係が成立しないことから自然に導くことができる。また、普遍者の束とその例

化物が「セット」になることも、無制限の質的な組成によって説明することができる。そうすると、例化物説でほとんど手つかずのまま措定された普遍者の束とその例化物の「例化」は、普遍者の複数性から個物としての質的な融合体を産出し、数的同一性から区別される無制限の質的な組成関係によって十分理解可能である。特に MIV においては、例化物と普遍者の束の間の緊密だが非同一的な関係性を保証するのに求められる例化関係を、彫像と粘土の塊の間に成立する物質的構成になぞらえる必要もなければ、普遍者の所有を説明する構成要素関係からまったく独立に理解する必要もない。MIV は、例化物説の例化関係と構成要素関係を「組成」と「真部分」というメレオロジー一般で措定される、互いに関連し合った原初的關係で置き換えるからである。つまり、構成要素と例化という相互に関係し合うことがない二つの関係は、MIV においては、同じ理論的役割を維持しつつ、質的なメレオロジーの観点から統一的に理解することが可能なのである。

最後に、ブラックの宇宙をめぐる議論に移ろう。MIV がブラックの宇宙を適切に説明するには、例化物説が「普遍者を完全に共有する個物は数的に同一でなければならない」という原理を拒否するのと類比的に、質的な真部分についての外延性を拒否せねばならないだろう。つまり、質的な組成が行なわれる際、普遍者の複数性は必ずしも、たった一つの質的な融合体だけを一意的に産出するとは限らない。よって、不可識別な鉄球 c と p はまったく同じ普遍者、すなわちまったく同じ質的な真部分を持つとしても数的に異なりうるのである。だが、MIV はこの外延性の拒否を巡る議論を例化物説よりも手広く、そして秩序立てられた仕方で展開することができる。というのも、時空上の真部分に関する外延性が広く問題とされてきたのと類比的に考えれば、質的な真部分についての外延性を拒否するやり方には複数あると考えられるからである。たとえば、時空上の部分をめぐる哲学的パズルを解決する文脈でしばしば示唆されてきたように (Simons

1987, 116), 次の強い質的な補部分 (strong qualitative supplementation) の原理を拒否する道があるだろう。

- (1) もし x が y の質的な部分でないならば, x の質的部分ではあるが y と質的に重複しないような何らかの z が存在する。

直観的に言えば, (1) が述べるのは, ある対象の質的な非部分は, その対象と質的に重複しない (つまりその対象と共通の質的な部分を持たない) 質的な部分を持たねばならないということである。つまり, y と質的に重複しない質的な部分を x が持っていない限り, x と y の間に質的な部分が成立しないことはありえない。これは, 質的な真部分の違いがなければ数的な違いはありえないとする外延性と明らかに親和的である。形式的に言えば, 強い質的な補部分の原理が成立しないとき, 同じ質的な真部分を持つ対象どうしが数的に同一であることは保証されない (Lando 2017, 143ff.; Cotnoir and Varzi 2021, 111ff.). したがって, c と p の数的差異性を説明する一つのやり方は, 単に質的な真部分についての外延性を拒否するというよりも, 強い質的な補部分の原理を拒否することにある⁷。

その他の方法として, 強い質的な補部分の原理を受け入れながら, 質的な部分関係の反対称性 (anti-symmetry) を拒否する道もあるだろう。というのも, しばしば指摘されてきたように, 仮に強い補部分の原理が成立するとしても, 部分関係の反対称性が成立しない場合には, 外延性の原理を引き出すことはできないからである (Cotnoir 2010; Cotnoir and Bacon 2012; 横路 2021, 364ff.). これと類比的に, 質的なメレオロジーにおいても, 次の質的な部分関係の反対称性を拒否すれば, 質的な真部分についての外延性を認めずに済む。

- (2) もし x が y の質的な部分であり, かつ x と y が数的に同一では

ないならば、 y は x の質的な部分ではない。

もちろん、質的な部分関係の反対称性を否定するようなメレオロジー体系は、ポールの体系から大きく逸脱し、さらに少なからぬ理論的コストを払わねばならない⁸。だがこのことは、(2) を否定する質的なメレオロジーが非古典的であるという事実を強調するにすぎない。古典外延メレオロジーが多くの場合時空上（または物質上）の部分を想定していること、そして時空上の部分のあり様が質的な部分のあり様とまったく異なっている可能性に鑑みれば、質的なメレオロジーが古典外延メレオロジーの置く公理や定義から逸脱したとしても、それほどおかしくはないだろう⁹。

どのような公理と定義を採用するのであれ、質的な真部分についての外延性をどのようにして拒否するかという問題は、質的な部分のメレオロジーとしてどのような体系が妥当かという問題と明らかに連動している。そして、普遍者を個物あるいは質的な融合体のメレオロジカルな部分と捉えることで初めて、外延性を秩序立てられた仕方あるいは形式化可能な仕方拒否するやり方には様々なバリエーションがあると考えることが可能となる。例化物どうしが普遍者を完全に共有しても数的に同一でない根拠は、MIV においては、質的な部分関係をどのように理解すればよいかという問題へと還元されるだろう。言い換えれば、例化物説が「普遍者を完全に共有する個物は数的に同一でなければならない」という原理をただ否定するのは違って、MIV が外延性を否定する仕方は、強い質的な補部分の原理の是非や、質的な部分関係の反対称性の是非と関連付けられるがゆえに、いまや多様な可能性に開かれている。したがって MIV は、同じ普遍者を共有する c と p が数的に異なる鉄球として存在するという事態を、時空上または物質上の外延性を拒否する仕方と類比性を保つ仕方説明できるという点で、例化物説にはない利点を享受する理論である。少なくとも、MIV において外延性の放棄は、質的な融合体のアドホックな定義から

導かれるものではなく、質的な部分関係の非古典的なあり様をどのように理解するかという観点から得られる。

5. まとめ

まとめると MIV は、いくつかの質的なメレオロジカルな関係を導入することで、普遍者の束と例化物を区別する例化物説の基本精神を引き継ぎつつ、そこにミステリアスでもアドホックでもない種類の説明を与えることができる。その要点は、普遍者の束と例化物の「例化」を、普遍者の複数性と質的な融合体の間に成立する、無制限かつ同一性から区別される関係である「質的な組成関係」から捉え直し、さらに普遍者を完全に共有する二つの例化物の存在を質的なメレオロジーの非外延性、ひいては質的な部分関係の非古典的な理解のもとで認めることにある。こうすることで MIV は、例化物説に投げかけられる疑問に適切な応答を与えることができる。

まず、個物による普遍者の所有関係に対する単純な説明を犠牲にしてしまおうのではないかという疑問に対しては、MIV は直観的に理解可能な「質的な真部分関係」を使って応答することができる。このとき、例化物説で独立に措定された「構成要素」と「例化」という関係は、質的なメレオロジーの観点から統一的に理解できる。次に、例化物ではなく普遍者の束だけが複現可能であることの根拠を問う疑問に対しては、MIV は普遍者の束を普遍者の複数性と捉え、かつ質的な組成を普遍者の複数性から具体物としての質的な融合体（個物）を産出する力能を持った関係と捉えることで応答可能である。普遍者の束だけが複現可能でその例化物がそうでないのは、複現可能な普遍者が複数集まっただけの「普遍者の複数性」は複現可能であり、それは複現不可能な具体物から厳密に区別されるが、他方でそれらから質的に組成される「質的な融合体」は、質的な組成が具体物を産出する能力を備えるものである限り複現不可能だからである。最後に、

ブラックの宇宙に対する応答として例化物説は「例化物」をアドホックに定義しているだけではないかという疑問に対して、MIV は質的な真部分についての外延性を拒否する仕方が複数あると示すことで応答する。つまり、ブラックの宇宙が提起する問題は、「普遍者を完全に共有する（すなわちどのような普遍者を所持しているかにおいて一切識別できない）個物 x と y は数的に同一でなければならない」という原理を拒否すべきかどうかという問題ではなく、質的な部分関係をどのように理解すべきかという問題として捉え直すことができる。質的な部分関係の理解は多様な可能性に開かれている以上、問題の原理を拒否するだけに留まる例化物説に比べ MIV は、ブラックの宇宙をめぐる議論——それはしばしば、形而上学者が自身の立場を表明し合うだけの水掛け論に終始しがちである——を前進させることに寄与するはずである。そしてこうした寄与は、非外延メレオロジー体系を質的な部分に適用することのメリットをも浮かび上がらせてくれるだろう。

もちろん、以上の議論は、例化物説が MIV へと還元されると述べるものではなく、MIV としてメレオロジー的に再解釈可能であると述べるにすぎない。しかし、例化物説のエッセンスが特定の質的なメレオロジーの言語に翻訳可能であることは、例化物説の支持者を勇気づけるように私には思われる。なぜならば、そこで導入される「真部分」や「組成」といった原初的な表現は、時空上または物質上のメレオロジーと類比的である以上、直観的かつわかりやすく、例化物説にまつわる困難に対して新しい仕方に対処可能だからである。したがって MIV は、例化物説がよりよく発展していくためのありうべき道の一つを指し示しているのである¹⁰。

註

¹ ブラックの宇宙を説明するために束論者が頼ることのできる方策は他にも数多くあるが、代表的なものは次の二つである（より詳しくは横路・大畑 2022 を参照）。第一に、鉄球 c と p は二つの場所に同時に余すところなく表れている——

いわばバイロケーションの状態にある——一つの鉄球であり、普遍者の束としての鉄球は、それと数的に異なる鉄球から空間的に離れているのではなく、その鉄球自身から空間的に離れていると考えることができる (O'Leary-Hawthorne 1995). 第二に、 c と p は位置的性質もしくは「2 マイル離れている」という非反射的な空間的關係において識別することができ、実際には構成要素としての普遍者を完全に共有しているわけではないと考えることができる (Shiver 2014). だが本稿で私はこれら方策を検討の対象に含めない.

² それゆえ、古典的な普遍者の束理論は、普遍者を個物の「(抽象的) 部分」と捉える構成的存在論 (constituent ontology) の一種として理解される。構成的存在論について詳しくは、横路・大畑 2022 を参照.

³ ただし、ポール自身は、質的な融合体から性質をひとつ取り除いただけの不完全な対象や、矛盾した性質どうしの質的な融合は不可能だとして、質的な組成に一定の制限を課すことを提案している (Paul 2006, 655, fn. 25; Paul 2017, 39, fn. 14). これに対しラフランスは、普遍者から制限なしに質的に組成される融合体は常に物質的对象とは限らないと認めることで、質的な組成について無制限組成の原理を維持することを提案している (Lafrance 2014, 212ff.). この二人の主張を比較するに、私はラフランスの提案に分があると思う。私の考えでは、不完全な対象が私たちに身近な物質的对象と似ても似つかないことは、不完全な対象が存在しないことを含意しない。これはちょうど、猫のティプルスからしっぽという時空上の部分を取り除いた対象は存在しないのではなく、猫という物質的对象に分類されないためにその存在が普段無視されているのと類比的である。また、矛盾した性質どうしの質的な融合についても、不可能世界における矛盾した対象の存在を認めるのに私はやぶさかではない。その世界では、パークレーカレッジの四角い円屋根は、質的な融合体としてはたしかに存在している.

⁴ 実際、ロドリゲスペレイラは、「例化物はその束の普遍者から構成される」 (Rodriguez-Pereyra 2004, 78) として、普遍者の束だけでなく例化物もまた普遍者を構成要素としていることを認めているように見える.

⁵ 束論者の中には、普遍者の束と単なる普遍者の複数性を区別した上で、後者を caboodle と名付け、「対象」ではないと主張する者たちもいる (Keinänen and Tahko 2019). しかし彼らの議論は、例化物説や MIV との関連で私が行なう議論とはまったく独立である.

⁶ この主張は、ポールがメレオロジカルな束理論を展開する際に展開するもう一つの見解、すなわち単一カテゴリー存在論 (one category ontology) と明確な対比をなす。この存在論のもとでは、種々の普遍者から成る質的な融合体は、「個物」という特定のカテゴリーに属する具体物ではなく、それ自体では複数の質的な部分から成る抽象物である。したがってポールの枠組みでは、質的な組成

は、抽象的なものを具体的なものに変えるほどの産出能力を持つわけではない (Paul 2017, 42)。しかしながら、メレオロジカルな束理論それ自体は単一カテゴリ-存在論と原則的に独立に成立しうる。質的な組成を抽象物から具体物を産出する関係として捉えることは、MIV は単一カテゴリ-存在論に立たないメレオロジカルな束理論だという事実を思い出させるにすぎない。

⁷ ポール自身も、自身の質的なメレオロジー体系に弱い補部分の原理しか認めておらず (Paul 2017, 38)、強い補部分の原理から論理的に帰結する外延性の擁護に慎重な態度をとっている (Paul 2006, 17; Paul 2017, 39)。同じように、ベノッキは質的な外延性を放棄することを提案している (Benocci 2018)。

⁸ たとえば、質的でないメレオロジーで指摘されているように (Cotnoir and Bacon 2012)、質的な部分関係の反対称性を否定する体系が弱い質的な補部分の原理を維持するには、質的な真部分関係を (多くのメレオロジー的体系で認められる) 非同源性ではなく非対称性によって定義せねばならないだろう。

⁹ ただし私自身は、質的かどうかに関係なく、古典外延メレオロジーにおける外延性を含むいくつかの公理は、「メレオロジカルな和」という特殊な存在者にしか当てはまらないと考えている (横路 近刊)。言い換えれば、古典外延メレオロジーは、身近で日常的な個物の「部分」の理解にまったくフィットしない。もしこれが正しいとすれば、質的な融合体として分析される個物が外延性を満たさないとしても、いかなる不思議もないことになろう。

¹⁰ 本稿に対して適切なコメントをくださった、柏端達也教授に謝意申し上げる。なお、本研究は JSPS 科研費 (JP20J00631) の助成を受けたものである。

参考文献

- Benocci, M. 2018, “The Repeatability Argument and the Non-Extensional Bundle Theory,” *Australasian Journal of Philosophy* 96, 432–46.
- Black, M. 1952, “The Identity of Indiscernibles,” *Mind* 61, 153–64.
- Cotnoir, A. J. 2010, “Anti-Symmetry and Non-extensional Mereology,” *Philosophical Quarterly* 60, 396–405.
- Cotnoir, A. J. and Bacon, A. 2012, “Non-wellfounded Mereology,” *Review of Symbolic Logic* 5, 187–204.
- Cotnoir, A. J. and Varzi, A. C. 2021, *Mereology*, New York: Oxford University Press.

- Curtis, B. L. 2014, “The Rumble in the Bundle,” *Noûs* 48, 298–313.
- Keinänen, M. and Tahko, T. E. 2019, “Bundle Theory with Kinds,” *Philosophical Quarterly* 69, 838–57.
- Lafrance, J. D. 2014, “A Bundle of Universals Theory of Material Objects,” *Philosophical Quarterly* 65, 202–19.
- Lando, G. 2017, *Mereology: A Philosophical Introduction*, New York: Bloomsbury.
- Lewis, D. 1991, *Parts of Classes*, Oxford: Blackwell.
- O’Leary-Hawthorne, J. 1995, “The Bundle Theory of Substance and the Identity of Indiscernibles,” *Analysis* 55, 191–96.
- Paul, L. A. 2002, “Logical Parts,” *Noûs* 36, 578–96.
- 2006, “Coincidence as Overlap,” *Nous* 40, 623–59.
- 2017, “A One Category Ontology,” in J. A. Keller ed., *Being, Freedom, and Method: Themes from the Philosophy of Peter van Inwagen* (New York: Oxford University Press), 32–61.
- Rodriguez-Pereyra, G. 2004, “The Bundle Theory Is Compatible with Distinct but Indiscernible Spheres,” *Analysis* 64, 72–81.
- Shiver, A. 2014, “Mereological Bundle Theory and the Identity of Indiscernibles,” *Synthese* 191, 901–13.
- Sider, T. 2007, “Parthood,” *Philosophical Review* 116, 51–91.
- Simons, P. 1987, *Parts: A Study in Ontology*, Oxford: Clarendon Press.
- Yi, B.-U. 1999, “Is Mereology Ontologically Innocent?” *Philosophical Studies* 93, 141–60.
- 横路佳幸 2021 『同一性と個体：種別概念に基づく統一理論に向けて』，慶應義塾大学出版会。
- 近刊「外延性・身体化・原初性：後藤へのコメント」，森田邦久・柏端達也（編）『分析形而上学の最前線』所収，春秋社。

普遍者の束理論のメレオリジカルな例化物説

横路佳幸・大畑浩志 2022 「構成的存在論：普遍者の束理論と基体説の現在地」, *Contemporary and Applied Philosophy* 13, 197–232.